＜中学校＞

3 時限目　損失のとらえ方

頭の中で理解できていても、なかなか思うようにならないのが自分の心理・感情のコントロールです。またその為にリスクマネージメントの導入が必要だということなのです。

マーケットの展開は完全に予測できるものでしょうか？ここで何のためらいもなく「はい」と答えられる投資家であれば、リスクマネージメントなんて考える必要ありません。完全に予測できるのですから、損失を発生させることも皆無なわけです。実際にはそんなことはありませんね。

多くの投資家の答えは、予測できるときもあれば、そうでないときもあると答えられるでしょう。中には全く予測できないという投資家の方もみえるでしょう。いずれにしても、完全に予測することは不可能だということは、動かしがたい明白な事実のようです。

この事実を踏まえた上で、目的である「利益の獲得」を実現していかなければならないわけですが、ここで既に矛盾が生じています。

完全に予測ができない、つまり利益の獲得がなされる保証がない。しかし中長期的には「利益の獲得」を実現していかなければならないわけですから。この部分だけをみてみると「利益獲得」という目標はまるで幻のようです。幻を追い求めて大切な資産を失うようなストーリーは悲しすぎます。そんな悲話に終わってしまわないように、リスクマネージメントの概念をしっかりもってハッピーエンドを迎えられるようにしていきましょう。

「マーケット分析」と「リスクマネージメント」

「マーケット分析」では予測不能であると前提を立てたほうがよさそうですし、より完全に近づけていくにしても、たゆまぬ努力と長期に渡る due diligence が必要となります。つまりマーケットで利益を取っていくための即効薬ではないわけです。だからといって「マーケット分析」をおろそかにしてもよいということではありませんが、やはり「リスクマネージメント」ありきで考えたほうがよいということです。

売買を行う際には、通常上がりそうだという判断から「買う」という行動を取るわけですが、これは「マーケット分析」を行い、それに基づいた行動なわけです。しかしその「マーケット分析」自体が完全無欠ではないものですから、その行動には、仮にこの判断が誤ったものであった際、どういう行動をとるべきなのか？また誤ったと認識されるのは、どういう場合か？というのを事前に用意しておかなければなりません。これがリスクマネージメントの第一歩ともなります。

もうすでにお分かりいただけたと思いますが、「マーケット分析」と「リスクマネージメント」は一対で考えなければいけないということです。もっといいますと「マーケット分析」では売買での勝ち負けの勝率を上げていく上で必要な要素であり、「リスクマネージメント」では、売買の結果での勝ち幅お

株式会社フィナンシャルヴィレッジ

よび負け幅の絶対値を決めていくことに必要な要素ということになります。特に負け幅を限定していくということが、長期にわたってプラスの運用パフォーマンスを上げていく重要な課題となります。

つまり上記のように「買う」という行動の背景には、「マーケット分析」において「買う」という判断に至ったシナリオがあるべきで、そのシナリオとはどの位まであがるだろう、また思惑と反対に動いた場合、すなわち「マーケット分析」が誤りであったという判断を決定すべきポイントはどこで、そのポイントでは一目散に撤退するという明確なスタンスを兼ね添えている必要があります。

基本的にこの段階までは、マーケットに相談して決定していきます。つまり「マーケット分析」の一環として行うべき「リスクマネージメント」となります。どうマーケットと相談するかについては、一番基本となるのはチャート分析でしょう。この点については、高等学校の「テクニカル分析」で取り上げていますので、詳細の説明は避けますが、トレンドラインであったり、レンジブレイクであったり事前に明確に認識できる分析手法が適当でしょう。図にトレンドチャンネル内での売買とシナリオを提示しました。

図

シナリオ

＊ 下降トレンドチャンネルで推移すると判断。（メインシナリオ）

＊ 現在値は 121.00 円とトレンドチャンネルの上方にあるため売りからエントリー。

＊ メインシナリオがトレンドチャンネルで推移するということから、①のリスクテイク限度ラインをマーケットが上抜いた時点②でロスカット（エントリーの時点で 121.15）を行う。ここで投資感情を入れて、次のレジスタンス（上値抵抗）レベルが 121.30 や 121.55 近辺にあるから、

そこまで様子を見ようという行動はご法度！たとえその後に結果として利益を取ることができたとしても、それはただの偶然です。今後も継続して、その行動がよい結果を生むという期待はもてません。

＊ トレンドチャンネルの下方の 120.00 割れ近辺のターゲットゾーンとなります。ここでの注意点はこのトレンドチャンネルを支持しているマーケット参加者が多ければ多いほどこのサポート（下値支持）ラインは固持されますから、欲を伸ばしてラインぎりぎりまで見切ろうとしないことです。往々にして、このようなトレンドチャンネルを下にブレイクした場合、下落のスピードを加速させることがあります。その展開は、このシナリオとは全く関係ありません。つまりそれを期待して利益獲得のチャンスを逃してしまっては何にもならないのです。トレンドチャンネルのブレイクした時の戦略は別に立てて改めてエントリーすればよいのです。この例で言えば 119.90 円のストップセル（逆指値の売り）オーダーで対処するべきでしょう。

株式会社フィナンシャルヴィレッジ